

1985年の本。

そういえば、最近“なにくそ” “コンチクショウ” という感情が出てこない。

「女性に対して真剣であればあるほど、彼の知識は広がり、思索は深まり、正義感は強まり、トリックにたける。こうして頭を鍛え抜く機会が増える。」——なるほど。

このように上役への憎悪は、向上するモチベーションとして非常に重要である。その場合、強大な相手を納得させるだけの論理を持つために、その裏づけとなる勉強をするわけだから、かなりの勉強量が必要となる。人間はさもしいものであって、“コンチクショウ！” と思った時に勉強は大いにはかどるのだ。従って、頭を鍛えるためには実に効果的である。

ところで、スポーツでも芸事でも、楽しんでのんびり道楽としてやっている人は、時間を注ぎ込んでいる割には力が伸びない、と言われている。勝負にこだわる人が、結局のところ最も伸びるらしい。今度は負けまいとするから反省が生まれ、一度おかしした誤りは二度と起こさないよう細心の注意を払う。企業でもまったく同じで、上司から注意された口惜しさやライバルに論破された屈辱感から逃げない人や、プライドを捨てて自分を素直に反省する人が伸びるわけだ。

人間は放っておくととかく**楽な方へ楽な方へと流れがち**だ。その結果、カドがとれ、**次第にボケてしまう**ことになる。だからこそ、悔しさが自然に発生する状態や勝負にこだわる状況に自らの身を置く必要がある。

私は韓国に招かれて行くことが多いが、韓国経済に関しても、私はこの、個人的なレベルから経済を見るという方法で理解している。

韓国と日本の関係は大変複雑で、いろいろな怨念がうずまいている。たとえば、**私たちの世代では、戦争中に日本は韓国に対していろいろとひどいことをしてしまったのだから、何かで返さなくてはいけないというコンプレックスがなかなか消えない。**

韓国招待のおりにキーセンパーティーどうもこのような例ばかりで恐縮であるがーをやってもらった時にも、日本語のできる美人のキーセンの方を見てたまらなくなった。どうしてこんな美人がキーセンをやっているのだろう、こんなことが許されるかとやりきれなかった。これは美人に対する私の個人的な心情と、韓国に対する社会的コンプレックスとの複合によるものかもしれない。

余談になるが、これは、本を書く時の意欲とか出来栄えにも通じるもので、私はちょっとした論文を書く時に、彼をたたいてやろうと、その人の顔つきとか、文章とかをチラチラ思い浮かべる。そうして書いたものは、非常によくできる。また、ぜひあいつに読ませたいと思って書くのも迫力があって**出来栄えがいい**場合が多い。

私は若い頃、学者になりたかったが、それが実現できなかったという怨念を持ち続けてきた。それがパワーの一つとなって、東大の教壇に立つこと、岩波で本を書くこと、NHKで解説すること、朝日新聞で書くこと……など、他人が見たらコッケイとしか思えない形で怨念を晴らしてきた。それらはみんな、会社の中で働きながら、頭を鍛え、怨念を育てた結果である。あとは聖心女子大の教壇に立ちたいという夢がある。

私が猜疑心を持つべきだというのは、人は誰でも、生まれ育った環境や、時代背景や、思春期の時期に受けた精神的な衝撃等によって、それぞれ独特な感じ方や考え方を身につけてしまっているものだからだ。心に大きな屈折を受けた人ほど、感じ方や考え方が特殊であり、そうした人ほど、世間一般と自分の考え方との差が大きくなるから、自分の考え方を強く主張したくなり、文章を書いたりする。

ところで、世の中の人々は常識的な考え方を述べた記事をあまり喜ばない。自分とほぼ同じ考え方を読んでも意味がないからだ。少し変わっていて、しかも世の中の一面を鋭くついているものは読みごたえがある。つまり、心が少し屈折した人の視点の方が、かえって喜ばれるわけである。したがって、大部分の本やジャーナリズムの記事は、屈折した人々の自己表現の結果とも言える。

だからまず、この報道はどのような視覚に立ってなされたものかと猜疑心を持ち、そのあとでゆっくり自分なりの見方のかぶせていって、自分の独特な見解に仕上げていく手順をとることが大切になってくるのだ。

「いや、さんざん仕事して疲れて帰った後では、とても勉強できない」と信じ込むのでは、人生における挑戦をあきらめて安易な道をたどっているとされても仕方ない。

だれでも女性をくどくための多様な戦略を持っているだろう。対女性戦略を考え抜くことは実に楽しいことであるので、時間を忘れて頭を鍛えることになる。重要なのは、その鍛えた結果を経済や経営戦略や外交戦略に応用する能力を身につけることである。

女性にはあまりあせって肉体的に接近しすぎると嫌われるし、さりどて、あまりにも紳士的に対峙続けると親近感を持たれない。恋は駆け引きであって、相手の気持ちにあわせて行動しなくてはならないので、なかなか難しい。しかし、この駆け引きやトリックは楽しいものである。半年先までに彼女の心をとらえようと目標を設定し、その展望の中で毎日の行動を決め、相手の好みやその日の気分に合わせて自分の言動にバリエーションを持たせていくためには、自分の全能力を傾注するほどの努力がいる。

相手に関する細かい情報を知っていなければ、相手の心をひきつける機敏な行動は難しい。相手の教養と同じレベルの教養も身につけなければならない。相手の人生観も深く知らなければならない。そのためにはモーパッサンやボーボワールやジョルジュ・サンドを読まなくてはならない場合もあろう。苦手なクラシックのコンサートに足を運ばなければならない場合もあろう。相手の信頼を得るためには正義感に燃えている必要もある。公害問題や同和問題、ソ連

のアフガニスタン侵略、タンザニアの飢えた子供たち、などに対して道義的な怒りを燃えさせたせなければならない。

女性に対して真剣であればあるほど、彼の知識は広がり、思索は深まり、正義感は強まり、トリックにたける。一人の女性との関係でも、こうして頭を鍛え抜く機会が増える。多数の女性を対象にすれば、**頭脳はまさに立体的に鍛えられてくるだろう。それは、総合力の勝負である。**

これも私の体験からくるものであるが、それは、いろいろ調べ、いろいろ読んで、半年なり一年進んだ段階で、友人や同僚・先輩の前で演説をブツことだ。前の例でいえば、石油問題に関する自らの見解を述べる、あるいは石油問題に関するニュースの解説を試みる、といったことである。そのためには、それまでの成果を整理し、論理的にも矛盾のないよう考えを錬らなければならない。しかしそれでもなお、世の中には特定の問題に精通している人間がいるもので、思いがけない反論が出る。「マイッタ」と恐れ入って引き下がらなくてはならないこともあるだろう。それが大切なのだ。自分の論理の欠陥や知識の不足を知らされて「マイッタ」と思うことは、そこからまた考え調べ直し、やり方のミスを訂正して進むための重要なチェックポイントなのである。**反論してくれた人には感謝して、再び訂正した自分の見解を述べ、更に反論してもらおうというようにして、自分を鍛えていくのである。**その過程で、「次こそは反論されないぞ」というモチベーションも生まれる。自分の調査・研究に間違いがあれば、できるだけ早く訂正するにこしたことはないから、この繰り返しは非常に意義がある。我々ビジネスマンは、普通、講義をうけたり先生に質問したりということはできないので、一人でコツコツと勉強するしかない。だからこそ、こういうチェックが大切なのである。

手塚氏の場合、特に興味深かったのは、『鉄腕アトム』の中心テーマは「差別」だと言われたことである。そのテーマの源は、敗戦直後の進駐軍から受けた差別体験にあるようだ。

当時、日本人は進駐軍から徹底的に差別されていた。とくに手塚氏の心に印象として刻み込まれたのは、プールにおいてであったという。日本のプールなのに、日本人は金網に隔てられたこちらからただ見るだけである。むろん日本人は泳ぐことを禁じられただけでなく、中に入ることも許されなかった。若き日のアトムは、金網にへばりついて、いつまでも中を眺めていたわけだが、この時の怨みつらみがやがて創作意欲をかき立て、『鉄腕アトム』を生み出す根源になったという。アトムは、ロボットとしてどんなにすぐれていても人間にはなれず、結局人間にうまく利用され差別され続ける悲しい存在なのであり、ここには自分の怨念がこもっている、と手塚氏は言われるのである。